



夏場の卵重制御対策

～今年後半の相場に対する備え

今年2月の鶏卵相場は、東京Mサイズで203円と比較的好調な滑り出しだった。その後東日本大震災による物流の混乱で、4月は245円の高相場となったが、物流の回復により鶏卵は在庫過剰となり、6月平均は190円、7月平均は170円と急激に相場が下がった。

これから求められるのは1個1個の卵をいかに高く売っていくかだ。今回はそのために重要な「卵重制御」について全農作成のマニュアルから抜粋して解説する。夏場対策とともに備えよう。

●基本はLMサイズを増やすこと

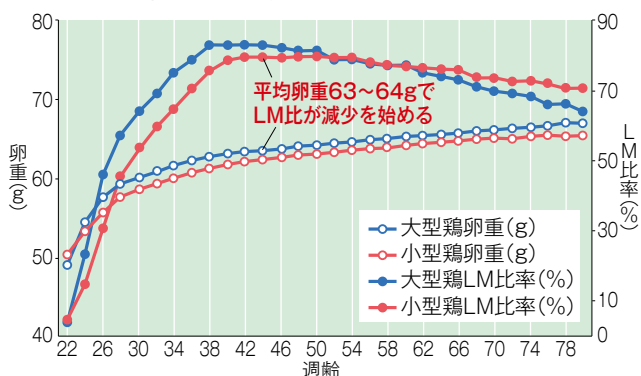
卵はやはり重量、という考え方もあるが、個卵重も重要だ。過去のサイズ別相場から卵1個当たりの価値を見ると、卵重が大きいほど重量は取れるが、安いLL超も増える。また、大きすぎる卵は卵殻が薄く、割れやすい。

割れた卵は集卵ラインでほかの卵を汚し、汚卵の原因となるため二重の損失となる。LM比が高いほうが、卵1個当たりの価値は高い。その理由はLMの相場だけではなく、過大卵を少なくできることにもよるのだ。平均卵重が65gを超えると破卵率が増える。65gは過大卵ではないが注意が必要だ。

●卵重に影響する要因

- ①産卵初期に、早く卵を大きくすると収益の改善につながる。初期卵重を高めるためには、産卵前期の体重と点灯管理が重要である。飼料の与えすぎを避け、適正な体重を維持していこう。
- ②飼料中の粗タンパク質が高い場合より、飼料中の粗タンパク質が低い場合のほうが、卵重が重くなるペースがゆるやかになる。

図1：期別給与の飼料の切替の目安



全農飼料畜産中央研究所調べ

③産卵後期は、必要以上のタンパク質の摂取は過大卵の増加につながる。産卵後期に飼料中粗タンパク質を落とす期別給与が重要である。期別給与の切替時期はLM比が減少を始める卵重63～64gを目安とし、産卵ステージごとに2段階(前期・後期)の飼料を使い分ける。切替による効果はすぐには表れないが、夏でもメリハリのある判断をしよう(図1、2)。

④気温の上昇は飼料摂取量を減らし、卵重を下げるため、適温に保つことが大切である。重曹を給与し、血中のイオンバランスを保つことで飼料摂取量と卵重の低下を防ぐことができる。

⑤育成期に性成熟を抑えると、初期卵重が重くなり産卵後期の卵重も重くなりやすい。

一方で、性成熟を促進し初産を早めると、初期卵重は軽く生涯を通じて卵重は小さくなり、過大卵率が減少する。初産促進は育成期の点灯プログラムでコントロールできる(図3)。

現在の卵重をきちんと把握し、これらの方法を組み合わせることで、1ヵ月ほど先の卵重をある程度操作することが可能である。

図2：期別給与の一例

●大型鶏……卵重63～64g(約40週齢)

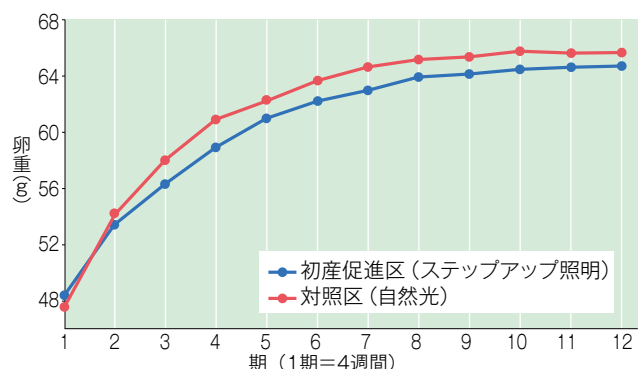
産卵前期飼料 CP17%－ME2,850kcal/kg	産卵後期飼料 CP15.5%－ME2,830kcal/kg
--------------------------------	----------------------------------

●小型鶏……卵重63～64g(約48週齢)

産卵前期飼料 CP18%－ME2,850kcal/kg	産卵後期飼料 CP17%－ME2,830kcal/kg
--------------------------------	--------------------------------

※ CP：粗タンパク質－ME：代謝エネルギー

図3：卵重コントロール



養鶏の友1993